



第167号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長
竹内正勝
編集人 会報編集委員長
丸山剛
印刷所 須坂新聞社

「見る力、聴く力」を強め、

生活知が飛び交う授業を

研究副委員長 重倉 紘一

「子どもにとって、わかり、魅力のある授業のあり方」を中心テーマとし、筑波大学教授 谷川彰英先生をお迎えしての研究が四年目になる。

わかる授業とは、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかしく、ふかいことをおもしろくすること。」と言われる。

今年度の課題は、「わかる、できる、魅力ある」授業との関係を探り、子どもが見通しをもって、意欲的に追求し、

根拠をもって集団の中で練り上げ、活動や自己を見返していきけるような授業のつくり、そのための教師の具体的な指導、援助、評価の確かなさ

に導く授業を目指し研究をさらに進めていくこととした。

四月十八日研究総委員会「生活知から学校知を問う」の谷川先生のお話では、教科書の中に凝縮されてくるよう

な、読むこと書くことを中心にした学校知が、今問われている。

授業とは先生が構想を持っていると同時に、子どもが問題を解決できる場所である。

子ども達と先生が一緒になって学習を作っていくこととする時には、生活知が必要になる。

そして、学校の中でこれまで十分にできてこなかった、見る力、聴く力をもっと強めていく必要がある。

このお話を受けて、七月五日の第一回研究日には、須坂小学校で技術家庭科「暮らしと買い物」の研究授業を行った。

主眼を「店に売っているきゅうりについて調べてきた子どもたちが、友達の発表を聞いた後、実際に選んでみたりする活動を通して、生鮮食品(きゅうり)の買い方は値段、品質、目的(用途・量)

を考えて購入することの大切さがわかる。」として、値段、品質、量の違う四つのコースを設定して、見る力、聴く力にウエイトを置いた授業を展開した。

「授業は、食べ物を前にし、指導者のキャラクターの良さもあり、選ぶ段階でも和気あいあいとしていて、明るい雰囲気の中で活発な活動がなされ楽しかった。」との講評をいただくと共に、単に値段、品質、量からきゅうりを選ぶという授業には、物足りなさを感ずるといふ指導があった。

「家庭科とは、単なる衣食住の問題を学ぶものではなく、

教科を越えた、人、人間の問題が大切であり、人間の生活が総集されて行くべきものと考えられないか。したがって、きゅうりを選ぶにしても、

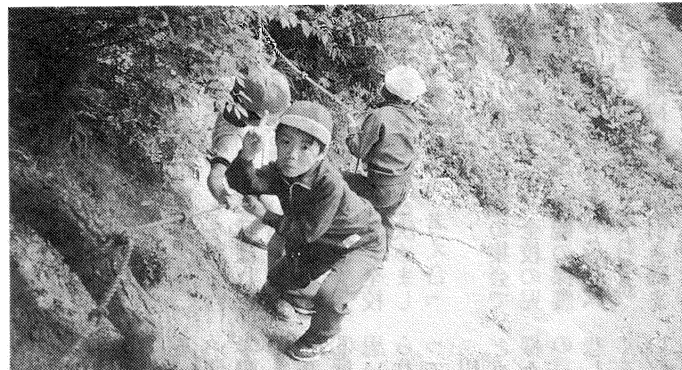
どういふ人間が介在し、どういふ社会が介在し、どういふ

必然の問題が介在するか、といった消費者教育や生産者、流通機構の問題まで広げられないか。」との指導があった。

学習が知識や概念の習得だけであってはならない。「言われたことをする」子から「自分は絶対これをしたかった」をもつ子を育てること、自分の足で立って、自分の関心によって、自分の生き方を決定できる子を育てるという発想で授業を仕組むことがたいせつである。そのためには、

子どもの現実生活が総集された、見る力、聴く力を駆使した言葉(生活知)が飛び交う授業を目指さなければいけないし、したいと思う。

どういふ人間が介在し、どういふ社会が介在し、どういふ



教育会だより

- 9・19 会館建設委員会
- 9・26 教育研究会学芸委員会レポート交換
- 10・4 教育研究会準備
- 10・5 教育研究会集會 於相森中学校
- 10・9 資料施設委員会新館への移転作業
- 10・13 第六回常任委員会
- 10・22 第七回代議員会

(会館 町田 徳)

須高の山と川⑨

鎌田山

「鎌田の山の松風に、夕べ心を澄ましては……」と校歌にも歌われているように、鎌田山は須坂小学校のシンボルである。子供たちの体力と精神力を鍛え、自然との豊かなふれ合いを直接体験できる場である。

校舎に面した西登山道は、高さ百メートルの頂上まで、かなり急な勾配の岩場を二百メートルほど登る。途中で階段や手すり・ロープが登り易いようにしているが、子供たちは慣れてくるとそれらの助けを借りず、玉ねぎ状に風化した岩石の面を、立ったままさっさと登っていきけるようになる。

この山の頂上からは、眼下に須坂市街地を、遠くに北アルプスや北信五岳、千曲川の流れが蛇行している長野盆地が一望できる。

下る時は、かつて坊主山に上っていたと伝えられる南登山道をおりることが多い。こちらは林の中に一本のなだらかな道が続いており、何もしなくとも足が自然と前にで気が付くと下に降りている。まれにカモシカに出会うことがあるのもこの道だ。やさしい人なつこい目で、子供たちがかなり近づくと逃げずにじっとしている。

下る途中の斜面には、かぶと虫やくわがたのいるくぬぎの木、たにし・おたまじゃくし・どじょうなどが生息している。ウグイス・キジバト・ムクドリなどの水飲み場になるドブ池など鎌田山は自然の生き物の豊かな宝庫でもある。ただし、北斜面はマムシの生息地といわれ、子供たちには近づかないように指導している。

赤トンボが学校の中庭に飛び交う頃になると、鎌田山に紅葉が始まり、色とりどりの落ち葉や木の実が子供たちの想像力によって様々な物に変身する。紅葉した鎌田山は美しい。(須坂小 斎藤 亨子)

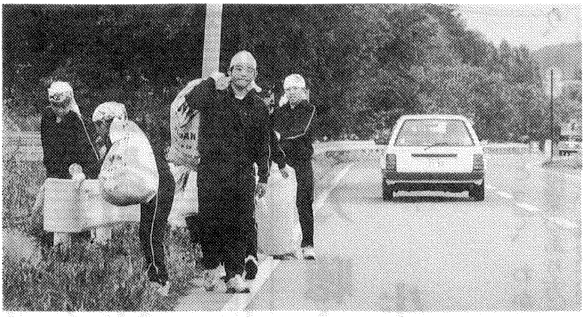
育てようとするもの

学校行事編

全校VS活動

宮尾正昭

本校は「青少年赤十字研究推進校」として指定を受け、平成六・七年度の二年間にわたって「生徒一人ひとりが深い思いやりを持ち、集団や社会のために奉仕する心と態度を育てるための指導はどうあったらよいか」を研究テーマに特別活動を中心に実践研究



を続けてきた。

その中の一つに、青少年赤十字の行動目標「自ら気づき考え、実践する」ことのできる生徒の育成をねらいとして、本年度新たに取入れられた活動として「全校VS活動」がある。この活動は、JRC委員会

の年間活動計画の一つとして生徒総会で承認され、まずは学級単位で取り組むことになった。各学級では、生徒の気づきをもとに話し合い、学級独自のVS活動が決め出された。臥竜山の草取り、鳥の巣箱作り、老人ホーム訪問活動、校舎内外の清掃、通学路清掃、八木沢川の清掃、幼稚園との交流などバラエティに富んだ内容であった。活動は月に一〜二回、第六校時終了後全校一斉の時間を取って進められたが、土曜日の午後や休日に独自で活動する学級もあった。

老人ホームを訪問した生徒は、車椅子のお年寄りと接する中で、一緒に話をしたり、

ゲームを楽しむことは思っていたより難しいことに気づき、勇気を出して話しかけたり、ゲームを簡単にして一緒に楽しめるように工夫するなど成長の姿が見られた。その他の活動でも、普段の清掃よりも熱心に雑巾掛けに取り組み生徒、袋一杯ゴミを拾って満足げな生徒、幼稚園に贈るおもちゃ作りや喜々として取り組む生徒の姿があった。

また、普段の学校生活の中でも自ら気づいて活動する生徒の姿が見られた。準備室の水槽が濁っているのに気づき、放課後掃除をしてくれた女子生徒の姿がその例としてあげられる。

学級によっては、活動を見返し、新たな気づきをもとに活動を変更したり、更に発展させている。本年度取り入れた「全校VS活動」が「自ら気づき、考え、実践する」一つの場となり得たのではないかと考える。一方で、学級の枠があると個々の気づきによるVS活動ができにくいというところもわかった。これから、個々の気づきを更に大切にした活動に目を向けられ

ばと思う。(常盤中)

言えてよかった

高橋千賀子

「私たち二年東組では、みんなで名前のことを話し合いました。」

「名前の呼ばれ方で、とっても悲しい思いをしている友だちが、たくさんいました。」(中略)「それから、みんなが勇気を出して、全校集会で発表しようと決めました。」

「名前の呼ばれ方については、学習への取り組み始めの頃、①入替え呼び ②改造呼び ③あだ名呼び ④呼びすて ⑤尻切れ呼び等され、切ない思いをした経験が、次々と語られた。涙をこぼしながら言ってくれた子も何人かいた。以後、解決していくために、どうするかの話合いでは、様々な方法が子どもたちなりの言葉で語られた。みんな、悲しい思いをする友だちを無くそうという気持ちでいっぱいだったのだ。」

「自分でも嫌だ不安と期待とで身が引き締ま

「次々と発表が続く。どの子も、はきはき、堂々の発表。昨日までとは別人のように映った、ステージ上の子どもたち。」(日滝小)

全校VS活動について

竜堀宏美

東中学校では今年度五月二十九日、午後の時間を使って「全校VS活動」を行いました。東地区にある大笹街道では例年六月初旬に「石仏祭」が催されていますが、以前からそれを前に一部の生徒たちが街道沿いのゴミ拾いをしてきました。それが全校規模となり、活動範囲を広げて昨年度より始めたものが「全校VS活動」です。今年度はクラスごと、大笹街道をはじめ、峰

道四〇六号線沿いに昨年度より設けたコスモス街道、校舎内外などの十一の場所に分散してゴミ、空き缶拾い、草取り等を行いました。クラスごとの活動ですが、各分担任は生徒会本部の役員がリーダーとして二、三名入り、計画や準備、当日の進行などをしました。「奉仕する生徒会」をスローガンに掲げている現生徒会ですが、このようにリーダーを育てながら全体を盛り上げて行きたいと願っています。

このような全校VS活動を始めて二年目ということもあり、まだまだ発展させていける点、改善していかねばならない点等が多くあります。今後とも生徒のVS精神の育成を願い、より良い活動をめざしていききたいと思います。(東中)

六年生がやる鼓笛吹奏楽

畠山智加江

須坂小学校には、鼓笛吹奏楽がある。発足して三十年という伝統を持つ。希望者ではなく六年生全員により組織され、六年生の担任が中心的指導に当たることになっている。

五年生の半ば頃に自分の楽器が決まり、同じ楽器を使う六年生から、楽器の扱い方、持ち方、演奏することまで全て教えてもらう。始めの頃は、師匠の六年生に頼り、押さえてもらったり、口びるの使い方や、口を合わせてもらったりして何とか音を出せるようになる。

「こんにちはトランペット」「校歌」「ドラムマーチ」は、師匠と弟子の対いで覚えていく。そして師匠に教えてもらった曲を六年生を送る会の時に演奏して、六年生に感謝の意を表す。

五年生にとって、「六年生に安心して卒業してもらおう」とか「これからは、自分達が学校の中心だ」という最上級生としての自覚を高めていく上に、大きな役割を果たしている。

六年生になると、四月のPTA総会や一年生を迎える会で発表をする。これも、しっかりやろうとする意欲を持ち、学年がまとまってくる重要な役を果たしている。

そして、運動会のドリル演奏を目標に、新しい曲の練習に励む。週三日、朝三十分の練習時間だ。時には面倒臭くなったり、怠けたくなったりする子ども達だが、担

任や家庭、他の先生方の声かけにより、出来るようになってくる。

運動会が終わると、自分たちが教えてもらったように、また自分の学んだ技術を伝える。その時には、師匠として、六年生として、しっかり伝えようと真剣である。

六年生の子も達には、時間的にも精神的にも大変な鼓笛吹奏楽はやめた方がいいと思うが、どう思うか。と問うと、「家の人がドリル演奏を楽しみにしている。」「大変だけどやりとげた喜びがある。」「みんなと一緒にやると楽しい。」「伝統として続いたらいい。」「意見が出てくる。約一年間を学年全体でがんばった、その充実感がそんな思いを持たせるのだろう。六年生が一丸となって努力した日々は、子ども達の小学校生活をより思い出深いものにするだろう。」

須坂小学校は、児童数が減少し、鼓笛吹奏楽の存続が難しい状態になってきた。子ども達の遊ぶゆりの時間も減らしている。指導者も、吹奏楽という特別な分野の指導なので、六年生の担任には負担がある。楽器の修理代等の費用が市の予算ではない。等々、考えていかなければならない課題もかかっている中で、子ども達と共に輝こうとがんばっている。(須坂小)

相中運動会

宮下秀和

あれは、小春日和の暖かな陽射しが差し込む穏やかな日でありました。前校長先生が前任校の小諸の声原中学校にお迎えに来て下さったのは。「相森中学校には創立当時からずっと続いている運動会があるんですよ。…」とお話して下さいました。あの日から光陰矢の如し、もう三年になるうとしていきます。

相森中学校が創立されたのが昭和二十二年、新制中学と

本校の宝⑪

本校に伝わるもの

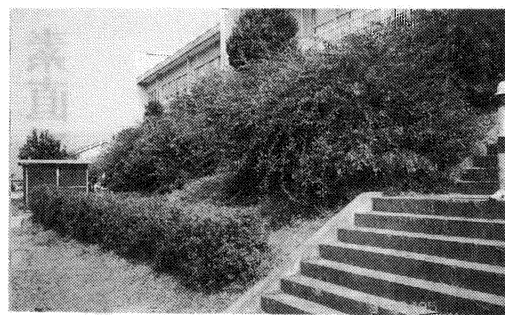
旭ヶ丘小学校

旭ヶ丘小学校は、創立二十五年の若い学校である。校歌に、次のような一節がある。

緑さわやかな 松川の
風わたりくる この丘に
希望は高く うち立てた
ああ旭ヶ丘 われらが母校

石をほり 草木を植えて
新しい 基築いた
大きな願い
どこしえに花さきかおれ

この校歌は、開校当時、本校に在職された先輩の先生



るとは何たる事かと一喝されたとの事でありました。

伝統種目として相中音頭が踊られています。「相中太鼓に合せて全校生徒で踊る相中音頭は今でも踊っていますか。」と地域の方々からこの時期になるとよく聞かれる事があります。地域の方々の熱意溢れる応援を頂きながら伝統行事として全校を挙げて取り組んでいる相中運動会、また運動会の歌もこの運動会のためにわざわざ作られて歌われます。今後とも益々充実、発展していくことを願っています。しかし、伝統に拘りすぎず、新しいものを受け入れない

という事のないようにともども心に留めながら、相中運動会を末永く続けていけるようみんなががんばっていききたいと思えます。

運動会の後は、転任なさった先生方と久し振りにお会いして、旧交を温め合うのも楽しい一時です。このときは、学校職員だけでなく、PTAの方々とも話が弾み、時の経つのも忘れてしまつほどです。この運動会を最後に転任なさった先生方もほとんど見えなくなり、転任なさった先の学校の先生になるといわれています。(相森中)

方のご苦労で作詞・作曲されたものである。初代校長伊藤祥久先生が、開校当時の様子を「十周年のあゆみ」に、次のように書かれている。

旭ヶ丘の傾斜地を大きくけずり取って、広いグラウンドと校舎が造られたわけです。グラウンドには、たくさん砂を入れていただきましたが、ガラで大小の石が多く、毎日の全校体操の時間には、必ず石拾いが行われ、その石がグラウンドの隅に山をなす有り様でした。この年の秋にはPTAの皆さんと全校職員・児童のお手つだいによって、たくさん木々が植えられました。大きな植穴に、えぐみを入れて、丁度植木鉢のようにして植え込まれたのです。

このようにして、植えられた木々が、現在、先輩の先生方や子どもたちの思いを力に、大きく育っている。特に、伊藤先生が植えられた南校舎前の「萩」は、今年の秋も、赤色の見事な花を上手いっばいに咲かせてくれている。まるで、先輩の先生方が、子どもたちや学校を思う気持ちであらわしているようである。この萩の花を見て、私達も、日々新たな気持ちにさせられるのである。

この他にも、ふるさと学習室(農業・工業・民族の資料が展示されている)があり、いろいろな教科の学習に利用されている。

伝わるものが宝であり、また、私達が作り出していくのも宝にしたい。(宮下知茂)



長野に赴任して

脇 充子

教師として子どもたちの前に立つようになって三年目の秋を迎えた。初めて出会った時には、まだまだ幼くて、大きなランドセルを重たそうに背負っていたクラスの子どもたちが、今ではずいぶん大きくなってきた。なかなか思うようにいかず、毎日の悩みの種である彼らだが、楽しませてくれたり元気づけてくれたりすることも多い。一人暮らしの私にとっては家族のような存在だ。

私は県外出身なので、風土の違いという点で驚くことが多い。私の育った環境と比べると、何よりもまず自然の豊かさを感じる。虫の捕まえ方も草花の種類も私よりずっと詳しく知っている子どもたちを前にして自分を省みると、本当に申しわけない気持ちになっってしまう。

また、核家族の子どもが少ないことにも驚いた。両親と同じくらいのかかわりを祖父母とも持っている子どもたちは、世代の違いを越えて様々なことを自然に吸収していく

素直で元気な

子どもたちと共に

松村佳世子

日野小学校に来てから、早いもので半年が過ぎてしまいました。いろいろと新しいことが多くてあたふたしてしまいが、そんな中でも特に楽しみなのが全校音楽です。前任校は、児童数が多くて体育館の後ろに並んだ高学年ははるか彼方、声がどうしても時間差で聞こえてずれてしまうという悩みがありました。日野

「研究の仮説①生徒のとなえ」から

教育課程研究協議会教案から

宮下正己

（前略）……自分の手をモデルにスケッチさせ、生徒の一人ひとりの美術に対する思い入れ（自ら学ぶ意欲・能力・態度）の実態を知ろうとした。絵画領域で写生（鉛筆スケッチ）からではあるが、各学年毎にまとめた傾向をとらえようとしてもよいと思う。もちろん、どの学年のどの生徒も「今ある自己の精一杯の表現である。」というところを大前提としたい。ここに見える「精一杯」についてであるが、自分が持っているであろう技術力を最高に発揮しよう。あるいは、今回のスケッチで

（前略）……自分の手をモデルにスケッチさせ、生徒の一人ひとりの美術に対する思い入れ（自ら学ぶ意欲・能力・態度）の実態を知ろうとした。絵画領域で写生（鉛筆スケッチ）からではあるが、各学年毎にまとめた傾向をとらえようとしてもよいと思う。もちろん、どの学年のどの生徒も「今ある自己の精一杯の表現である。」というところを大前提としたい。ここに見える「精一杯」についてであるが、自分が持っているであろう技術力を最高に発揮しよう。あるいは、今回のスケッチで

統を感じます。一生懸命に歌う顔に元気づけられて、毎日過ごしています。ところで、こちらに来て初めて家庭科も持たせてもらっています。全てが初めてで特に、六年生の「毎日の食事」の単元で「ご飯を鍋で炊く」なんて、本当にできるのかと、ずっと心配していました。子どもの前で恥ずかしくないように、自分で炊いてみました。さすがが教科書に書いてある通り、正しくやれば問題なく炊けるということは分かりました。が、自分でやるのと教えるのでは勝手が違ってお米を

うに従って、持っている力を素直に発揮できない、発揮しないですませてしまう何かがあるのではないかと考える。このところであるが、ほぼ全員が共通の価値観を持っていて、その価値観にとらわれる傾向が学年が上になる程増していると言いたい。あるいは学年を追うに従ってより共通の価値観を持つようになっっていく（なるう）としている。そのため、制作が自らの心を生き生きとした状態ではなく、つまらなくなってしまっているところが、多分にあるためである。「形がとれる（デッサン力の一部分）」あるいは「上手だ」といわれるところの描き方にとられ、それを共通の課題とする傾向が強く自分たちの中にその価値観に沿った序列をつけようとしているかのよう

「とぐ」など、ただ「洗ってー」と言ってしまったり、ポイントを全く教えられずにバタバタしているだけで実習が終わってしまいました。なかなか難しく戸惑うことばかりの家庭科です。毎日の生活に追われてばかりでなく、何か趣味でも持たなければと近頃考えています。とりあえず肩凝りに効きそうな水泳なんかを始められたらなあ、と思っっているのですが実行に移せる日はいつのことやら……（日野小）

にとらえられる。しかも、その価値観が、私が評価する時の基準と符合するように思えてならない。（相森中）

編集後記

各地から紅葉の便りが届き、里にも晩秋の気配がただよっています。今回の会報では、行事について特集を組みました。各校の特色ある行事の中で育つ子どもたちの様子をまとめることができました。（担当 久保田・岡沢）

